特集
大阪府貝塚市立第二中学校区

地域ネットワークづくりをめざして

―地域とともに育つ子どもたち―

横田　章彦

一　はじめに

貝塚市立第二中学校区（第二中学校、東小学校、津田小学校、中央小学校）は大阪府南部に位置する学校である。古くは繊維産業のさかんな土地であったが、校区で大きな位置をしめていたユニチカ工場も撤退し、その跡地を利用していた大型スーパーも四月末で閉鎖になるなど、そこで働く保護者、そして子どもたちにも影響を与えている。学校完全週五日制で毎週土曜日・日曜日が休みになっても、校区には土曜日も働いている保護者が多い。そのような状況の中で地域ネットワークづくりの意義は大きい。

第二中学校と東小学校は同和教育推進校[1]であり、古くから同和教育の取り組みで連携してきた。一九九一～一九九二年度に大阪府教育委員会より、第二中学校区として「同和教育協同推進校」の研究指定を受け、それを契機に四校の同和教育担当の二中校区連絡会が発足し、人権教育の系統化、学校間連携、学校と家庭、地域の連携などの実践をつみかさねてきた。さらに、一九九五～一九九九年度は府教育委員会より「ふれ愛教育推進事業[2]」の研究指定を受け、「学力を保障するための保・幼・小・中連携の在り方」「家庭の教育力を有効に発揮するための学校園・家庭・地域連携の在り方」を探ってきた。

この間、第二中学校区では、「開かれた学校づくり」を

すすめ、地域の人材や資源を活用して、人との出会いや体験学習を積極的に取り入れてきた。「課題」や「立場」をもった子どもたちが多い校区だからこそ、自尊感情を育み「生きる力」を育む主体的な学習を一層大事にし、取り組んできた。

そして、一九九九～二〇〇〇年度には府教育委員会より「夢をはぐくむ学校づくり」[3]推進事業の研究指定を受け、中学校区をあげて「総合的な学習の時間」のあり方を探ることになった。研究主題を「子どもたちが主体的に取り組む総合的な時間の創造」とし、副題を「子ども一人ひとりが豊かに育つネットワークづくりを進めながら」とした。

以上の長年にわたる、学校間連携・地域連携の取り組みのもと、「第二中学校区教育コミュニティ協力者会議」を広く組織し、地域の人材活用のための体制づくり、地域ぐるみでの「遊び」「学び」「育ち」をつくるための教育コミュニティづくりを進めている。

二　地域と結んだ教育活動

二〇〇二年度からの新教育課程にむけてすでに各学校で「総合的な学習」の取り組みがはじまっているが、「総合的な学習」は地域との連携がキーポイントである。第二中学校区では以前から地域との連携を積み重ねており、地域を教材とした取り組み、また地域に出かける取り組み、地域の方をゲストティーチャーにした取り組みなど、いろんな形で実践に地域が登場してきた。それが「総合的な学習」の取り組みを進める中でより大きな広がりを見せている。

簡単に各学校の取り組みのようすを述べると、まず第二中学校では、従来からの地域連携に加え、府下でもいち早く仕事体験学習の取り組みをはじめ、すでに六年が経過している。初年度は受け入れる地域の方も学校の方も、どのようなものになっていくのか不安だらけであったが、大きな成果をあげることができた。開店前のスーパーで一生懸命あいさつの練習をする生徒たち。手に傷があると生鮮食品売り場では働けないことを知った生徒。ガソリンスタンドで働くためにはいろいろな免許がいること。仕事の休憩の時に飲むジュースのおいしさ。生徒たちはいろいろな事を学ぶことができた。同時に、地域の方には生徒たちの素直さを知ってもらうことができた。この取り組みは今や地域にすっかり定着し、生徒たちが取り組みの前に行う、校区仕事調べで、受け入れ先を依頼した時「頼みにきてくれるのを待ってたんや」と言っていただくまでになっている。今回は六四の事業所から受け入れＯＫの返事をもらうことができた。それ以外にも、地区フィールドワーク、バリア

フリーを考える取り組みなど地域に出かける取り組みが行われている。また、選択履修では地域の方に学校にきていただくなどいろいろな形で生徒の学習に関わっていただいたり、校内行事でも地域の方に参加していただいている。

東小学校においても人権総合学習の取り組みで、いろいろな形で地域の方とともに学習を進めている。昨年度に実施した六年「チャレンジウィーク」（生活体験学習）の四日間の取り組みは、のべ一五六人の保護者の方がた・三四コースにもおよぶ事業所の方がたの協力によって、子どもたちの「自分の夢」実現にむけたさまざまな体験活動であった。この取り組みを通し、地域・人と出会い、「思いや願い」「生き方」にふれ、「自分がかけがえのない存在」であることを感じ、「チャレンジ精神」を養うことができた。五年生の「カレーで発見！人・くらし・世界」では食材としての泉州タマネギや食肉を調べる中で、地域で生き生きと生産に従事し、誇りをもって生活している人びとや、消費者の立場で健康や環境を考えようとしている人びとに出会った。バングラデシュの方との出会いから、世界にはいろいろなカレーがあることを知ることができた。いろいろな人との出会いの中で、互いを尊重し、認め合い、つながることの大切さを学んだ。

中央小学校では、地域の人材バンク「夢スタッフ」や保護者の協力のもと、さまざまな場面で地域と結んだ活動が取り組まれている。三年生「昔フェスタをしよう」の取り組みにおいては多くの保護者、六〇名もの多くのお年寄りの方がたの協力があり、昔のくらし、遊び、学校、町の移り変わりについて聞き取りなどをおこなうことができ、その成果の発表の際には、地域の方を招き、一緒になって報告を聞き、また交流をおこない、児童も地域の方も楽しいひとときをすごすことができた。

五年生「住みよい町づくり」では自然・環境・福祉・歴史文化の大きなテーマに子どもたちが二一のグループに分かれて調べた。その際保護者の方とともに調査や体験をしたり、地域の方から聞き取りをおこなった。その中で、今まで知らなかった校区のいろいろなことを発見することができた。

津田小学校は小規模校（各学年一クラス）ということもあって、従来から参加・協力型の授業参観に取り組むなど、津田小ならではの取り組みがおこなわれている。保護者のみならず、地域の人同士のつながりも強く、「地域全体で子どもを見る」という面が強く残っている校区である。またお年寄りの割合が高く、その特色を生かした取り組みが進められている。

三・四年生の「ふれあい　ゆめ　たんけんたい」の取り

組みでは地域に住んでいる人と出会い、自分の夢実現のためにいろいろな方からお話を聞いた。その中で、地域に住む大工さんと子どもたちのふれあいの中で、大工さんが子どもたちのためにミニだんじりを作ってくださり、運動会においてそれが披露された。五・六年生の取り組みの中で校区を流れる「津田川探検」の際、子どもたちが活動しているのを見て、近くの人がすぐに川に降りるためにはしごをもってきてくれるなど、いろいろな場面で協力していただいている。

以上のように、各学校での取り組みは大きく前進しているが、さらに、学校間の共同した取り組みも行われている。たとえば、東小学校と津田小学校の児童が共同して津田川クリーン作戦をおこなったり、中央小学校においても校区を流れる近木川をテーマにして取り組んでおり、お互いに交流することができた。三小学校の取り組みの上にたって第二中学校での取り組みもすすめられている。また、保幼小の連携、中高の連携、また中学生が仕事体験やボランティアで幼稚園、保育所に行くなど、校区全体で連携した取り組みが行われている。児童・生徒がいろいろな形で校区に出かけていくのがあたりまえという状況になっている。

三　二中校区教育コミュニティ協力者会議の活動について

このように、各学校においていろいろな形の取り組みがおこなわれている。どの学校においても取り組みのキーワードは地域との連携である。小学校においては「自分たちの町を発見する」「町のすてきな人と出会う」「身近な川を通して環境を考える」「修学旅行を通して平和を考える」などの取り組みが共通している。中学校では「人権」「平和」「進路」を柱に取り組みが進められ、小学校と同じようにいろいろな形で地域の方がたとの出会いがある。積極的に地域に出かけていくことにより、さまざまな交流が生まれ、また地域の方に学校の中に入っていただく機会が多くなり地域をあげての子育てという気運が高まってきている。活動を通しての、保護者・地域の方がたどうしの交流も増えた。

そのような気運の中で、「貝塚市立第二中学校区教育コミュニティ協力者会議」が結成された。その構成メンバーは表の通りで、①各学校の総合学習をはじめとした教育活動への協力、②子ども広場事業・ふれあいイベントなどの取り組み、③子育て支援の活動、④子育てに関わる情報収集情報発信を行っている。

※福祉委員会代表（各小学校区より計三名）
※各学校ＰＴＡ代表（各小学校及び第二中学校）
※子ども会育成会代表（各小学校区及び貝塚市子ども会育成会長）
※校区保育所代表　※校区幼稚園代表
※東青少年会館代表　※貝塚市教育相談員
※貝塚市教育委員会代表（教育指導課、社会教育課）
※地域協力者（五名）
※各学校長　※各学校担当者　※事務局長

①についてはすでに述べたように各学校における教育活動のさまざまな場面で地域の方が登場し、また地域に出かける取り組みが行われている。さらに校区全体で各学校の人材バンクの交流をすることにより、中学校区全体から協力をいただいている。

教育コミュニティ会議の中では、それぞれの立場から子育てに関わるいろいろな現状や課題が出され、地域の子どもの子育てについて話し合われている。これまでは、幼稚園、保育所から中学校まで、そして地域の方まで一堂に会し子育てについて話をする場がなかっただけに、会議の場ではいろいろな角度から今の子どもについて情報交換がされたり、それについての意見が交流されている。とくに日頃は学校の視点のみからの子育てが語られることが多いが、地域の方が参加していることにより、いろいろな角度から子育てについて議論することができている。また、各学校のＰＴＡの活動の交流や子ども会の現状を交流することによりお互いに刺激を受け、活動の参考にすることもできており、地域全体の活性化につながっている。

二中校区全体の取り組みとして定着してきているのが、「二中校区ふれあいイベント」である。このふれあいイベントは第二中学校を会場として、校区のすべての子ども、保護者、地域の方が集い、世代を越えた交流をめざしている。昨年で五回目となり、今までは学校主導であったが、昨年は、教育コミュニティ会議のもと実行委員会を組織し運営が進められた。実行委員長はＰＴＡから選ばれ、実行委員会には地元高校も参加し、いろいろな意見を出し合いながら準備が進んだ。校区福祉委員会、ＰＴＡ、学校、青少年会館、地元高校、公民館サークルなど多くの団体がもの作り、遊びなどの五〇近くのコーナーを用意し、二〇〇〇名の参加で大きな成果を上げることができている。

中学生も積極的にコーナーを担い、小さい子どもたちに手取り足取り、作り方、やり方を教える姿、子どもたちが蹴ったサッカーボールを中学生キーパーが受ける姿など、

参加した方からも「中学生がいろいろと子どもに関わる姿がよかった」「日頃少なくなっている異年齢の交流のきっかけとなる」など評価を受けている。

また、高校に進学した卒業生がこんどは先輩として、中学生や小学生に関わったり、地域のお年寄りがわら草履を作る姿を見て、子どもたちが驚きの声をあげ、一緒になって草履をつくる姿もみられた。あちらこちらで世代を越えた交流が見られ、また保護者、地域の方同士も学校を越えて楽しみながら交流し、今では地域のイベントとしてすっかり定着している。

日頃からの各学校での地域にでかける実践、学校間交流に加え、このようなイベントをもつことによって、学校、園が違ってもお互いに顔見知りというような状況も生まれてきつつある。

また、学校完全週五日制をにらんだ子ども広場事業の活動も大きく前進している。とくに東小学校ではいち早く「東小学校子ども広場ネットワーク」が結成され、二〇〇〇年一月から取り組みが行われている。この組織は、東小学校の保護者をはじめとして、校区の人びとや趣旨に賛同するメンバーによって運営されている。「自分のできるときに、無理なく、楽しく」を合い言葉に、六〇名を超える個人参加メンバー（活動委員）によって、月一回の活動が担われている。講座内容は、おもしろ科学実験、昔の遊び教室、太鼓づくりに挑戦、竹とんぼ・竹笛をつくろう、フリスビーで日本記録に挑戦、アジャタに挑戦、マンガ教室、料理教室、絵手紙など多種多様に渡り、地域に住むいろいろな特技をもつ方、子どもと一緒に楽しもうという方が集まり、毎回二〇〇名の子どもたちが参加しており、結集率は全校児童の四割に達している。また、ミニコミ紙「東校区ほっと通信」も地域の方の手により発行されている。

中央小学校においても、「夢スタッフ」のメンバーにより、一〇月から子ども広場事業がスタートしている。当初はどれだけの子どもたちが集まるか心配されていたが、三〇〇名を超える参加があり、地域の取り組みとして協力や運営に参加する団体も増えつつあり、定着してきている。

津田小学校においても「つだっこ祭り」、餅つき大会などいろいろなイベントを地域の方がたの協力で実施してきたが、その上に立って、三月より子ども広場をスタートすることができた。

子育て支援については、各校独自の研修会のほか、ＰＴＡでの合同研修もおこなっている。課題をもつ子どものケース（親子関係のくずれ、非行、不登校、いじめなど）に対してはケアケース会議をもち、関係者で情報交換と指導の方向を確認し、関係機関とも連携しながら、子育て支援

と保護者の教育力向上をはかっている。

また、子育て相談窓口として、東小学校内に「ほっとルーム」を開設し、土日をのぞく毎日、相談員や教職員が電話や面談で相談にあたっている。相談内容は、学習指導についてや、交友関係、進路、不登校などさまざまで、内容に応じ、話を聞きながら助言をおこなったり、保護者の不安を取り除いたりするほか、関係機関を紹介したりして問題の解決にあたっている。

情報発信については、地域の方の編集により、校区の情報紙「ゆめキャッチ」を発行している。地域のいろいろなイベントなどの情報、子育て相談の紹介、子ども会の活動、学校の取り組みの紹介など、いろいろな情報が掲載されており、各町会の協力で校区すべて（九五〇〇軒）に全戸配布されている。

四　今後の課題と「教育コミュニティ会議」のめざすもの

以上のように、とくにここ数年で、地域全体での教育活動が大きく進んでいる。まだまだ学校から発信することが多いが、「教育コミュニティ会議」でいろいろな議論を重ねたり、交流をするなかで、子ども会や福祉協議会など既存の組織の活動も交流することができ、お互いの刺激にもなっている。学校が核となりながら、いろいろな組織の活動が活発になり、地域全体としての教育力を高めていく活動が大切である。「だんじり」（祭礼）を通しての地域のつながりも強いため、それを活かすような活動も考えていくことも重要である。

また、従来からある「第二中学校区健全育成連絡会」[4]などの会議も「教育コミュニティ会議」に統合させ、より有効的な子育てができるようにしていく予定である。

現在は学校を中心とする教育活動に地域の方に協力していただくという形が多いが、今後は学校が地域の財産として、地域に還元していくという活動も必要である。すでに、東小学校では「パソコン教室」という形で学校のパソコンを利用してパソコン講習を行っているが、今後そのような活動を通じて、双方向の教育力の交流と支援を積み重ねながら、地域に根ざした活動を展開していきたい。さらに「地域の子ども」といった場合、地元の学校に通学している子どもが中心になりがちであるが、養護教育諸学校や私立学校に通学する子どもを視野にいれた取り組みも課題である。そして、学校を核として、地域全体で子育てを行っていくとともに、学校を核とした新しいまちづくりをめざしていきたい。

注

(1)大阪府教育委員会の委嘱を受け、同和教育推進校である第二中学校、東小学校および隣接校の中央・津田小学校において人権教育の系統化などの研究を協同しておこなった。中央小学校、津田小学校にも同和主担者がおかれ、小学校段階での同和教育の取り組み内容の統一化が進められ、その上にたって中学校での取り組みがおこなえるようになった。

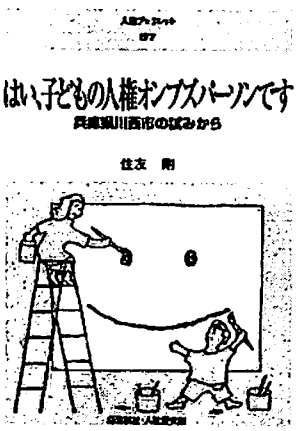
(2)チャイルド・コミュニティ・プラン＝CCP。大阪府教育委員会の指定を受け、学校・家庭・地域の連携を通してみずから学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応しうる能力の育成を図り、生涯学習の基礎を培うことを目標とした。各学校園、保育所、PTA、地域協力者、社会教育関係者により推進委員会が結成され、学習指導促進部会、家庭教育促進部会にわかれ取り組みが進められた。

(3)大阪府下で一〇中学校区が大阪府教育委員会の委嘱を受け、中学校校区単位で総合学習の研究をおこない、地域連携、校区連携をすすめながら学校づくりをおこなっていくもの。総合学習のカリキュラム、取り組みの研究をおこなうとともに、週五日制を見越し、地域と協働した教育のあり方について検討、実践を重ねた。

(4)青少年指導員、子ども会育成会、PTAおよび学校の四者が連携を深め、二中校区の青少年の健全育成を図ることを目的とし、青少年の実態把握と問題点の検討と対策協議をおこない、街頭補導をはじめ、状況に応じた活動をすすめている。

はい、子どもの人権オンブズパーソンです

―兵庫県川西市の試みから

川西市の全国初の試み「子どもの人権オンブズパーソン」。様々な悩みを抱える子どもや周囲の大人たちの声を受け止めつつ、総合的な子ども施策化をめざす実践の現場からの報告。

住友　剛著
解放出版社
A5判、79頁
700円＋税